

牛 島 徳 次

「中文学会」覚え書き

牛 島 徳 次

Notes on the Conference on Chinese Language

Tokuji Ushijima

〈まえがき〉

1. 現在、日本における中国文化研究に関する学術団体は、かなりの数にのぼるが、その中で特に歴史が古く、しかも全国的な規模を持つ学会としては、次の二つが挙げられる。

その一は、専ら中国語学を対象とする「中国語学会」（最近、「日本中国語学会」と改称）であり、もう一つは、中国の哲学・思想・文学・語学その他を対象とする「日本中国学会」である。

この二者はいずれも、「終戦」後まもなく結成され、現在に至っているもので、近代日本における中国文化研究の歴史を考える場合、欠かすことのできない、輝かしい伝統と実績を持っている。

2. この二つの学会は、それぞれの性格上、その発足時から現在に至るま

で、規模その他の点から見て、後者つまり「日本中国学会」は、前者つまり「中国語学会」を遙かに凌駕するが、その成立は前者の方が数年早く、しかも後者の成立は、前者の発足・活動と少なからぬ関係を持つ、と考えられる。

というのは、「中国語学会」の前身「中国語学研究会」が発足したのは、1946（昭和21）年10月で、場所は京都であり、「日本中国学会」が発足したのは、1949年10月で、場所は東京で、一見、両者の間には何のつながりもないように思われるが、実はこの1946年から1949年までの3年の間に、東京で生まれ、約半年間、目ざましい活動を続けたのが「中文学会」で、その発足は京都の「中国語学研究会」の影響によるものであり、その発展的解消が「日本中国学会」の設立につながる、と考えられるからである。

3. 四十数年後の現在、この「中文学会」の存在はおろか、その名称すら知らない人が多くなったが、あの「終戦」直後の混乱期に、新しい「中国文化研究」の建設を旨として苦心、努力した人たち、特に、戦前・戦中の研究の在り方に反撥した（あるいは、反撥しようとした）多くの若い人たちの足跡は、いつか、何らかの形で記録にとどめておきたい、とわたしはかねがね考えていた。

だが、こうした記録が果してどれほどの意味を持つのか、また、当事者のひとりであった人間が、乏しい資料と、おぼろげな記憶を基にして、どれほど事実を伝えうるのだろうか、という不安も無くはなかった。

4. 最近、ほかの仕事の必要から、自宅の本棚のあちこちを引っくり返していたら、「中文学会関係資料」と標記された紙包みが見つかり、中に半ばぼろぼろになった数冊のノートと、謄写版刷りの紙片類が入っていた。

古語に「事無非学」（事、学にあらざるは無し）という一句がある。こ

れも「学」の一端になるかも知れず、また、やりたいことはともかくやってみるのも、先行き短い身にとっては、「また喜ばしからずや」と思い定めた。

もしも、この「覚え書き」が多少でも意味があると思われたなら、当時のことを知っている方に、本稿中の誤りを正すなり、不十分なところを補っていただきたい。取るに足らず、と思われたら、これも老害の一種と、一笑に付していただきたい。

I 「中文学会」成立まで

A. 三つの「中国語の研究会」

1946（昭21）年9月半ば、わたしは八か月余にわたる京都での生活に別れを告げて、東京に帰ってきた。（私事にわたり恐縮だが、私事に言及しなければ、全く話しようがないので、暫くの間、ご容赦願いたい。）

1941（昭16）年12月の末、旧制東京文理科大学（漢文学専攻）を卒業したわたしは、翌年（昭17）1月、栃木県立栃木中学校に赴任。同年2月1日、東京世田谷の東部十二部隊に現役兵として入隊。5月、陸軍甲種幹部候補生として、豊橋陸軍予備士官学校に入学。それ以後、見習士官、陸軍少尉となり、東京と豊橋を往復し、1945（昭20）年8月、敗戦により召集解除となり、豊橋から東京に復員し、同年9月末、栃木中学校に復職。この年の10月、当時の京都帝国大学におられた倉石武四郎先生より話があり、12月、栃木中学校を退職、翌年（昭21）1月から、京大の倉石先生の研究室で、「中国諸方言の研究」の手伝いをする事になり、福建語の学習と同方言の研究資料調査に当たった。

この年の9月、思いがけず、母校の東京高等師範学校から話があり、再三辞退したが、結局、同校漢文科の教員に就任することになった。

京都を離れるに際し、わたしは倉石先生に、東京で中国語学の勉強を続けるについて、どういう人に教を請うたらいいだろうか、とたずねた。先生は当時、東京帝国大学の教授を兼ね、たびたび集中講義その他で上京していたので、よくご存知だと思ったからである。先生は即座に、若い人だが、とことわって、工藤篁さんと太田辰夫さんの名を挙げられた。

東京にもどり、豊島区高田の父の家に身を寄せていたが、暮れ近くのある日、杉並区大宮前の工藤さんの家を訪ね、中国語学の指導をお願いした。工藤さんは当時、東京商科大学予科に勤め、ご多忙のようだったが、快く承諾してくれ、あまつさえ、わたしが太田さんの名を口にすると、一緒に行つてあげよう、といい、世田谷区代田の太田さんの家に案内してくれた。太田さんは当時紅陵大学（戦前の拓殖大学）に勤めるかたわら、わたしの出身校である東京文理科大学の講師もしておられ、これまたご多忙のところ、快く承知してくれ、とりあえず毎週一回、誰かの家に集まって勉強会を開くことになり、まず選んだテキストが魯迅の「祝福」で、これを文法的に吟味することを重点とし、輪読することになった。

全く初対面のわたしの身がって、ぶしつけな願いを、おふたりとも即座に承知して下さったのは、倉石先生の紹介ということもあったであろうが、何といつてもそのお人柄、特に、新しい中国語学研究に寄せる、並々ならぬ情熱のほとばしりだったと思う。

このおふたりは、年齢的にはどちらもわたしより少し上だったに過ぎないが、その造詣の深さ、論説の鋭さ、精確さは、わたしにとって、この上もない指南車となった。これが、第一の「中国語の研究会」である。

そうこうしているうちに、この三人の会に、うわさを耳にした同好同志の人たちが、折々参加するようになった。たとえば、当時横浜高商に勤めるかたわら、月間『中国語雑誌』（帝国書院）の編輯者として活躍していた岡本隆三さん、神奈川師範に勤めながら、中国語学に関する論文を矢つぎ

早に発表していた長田夏樹さん、さらには、紅陵大学に勤め、数多くの中国語の文法に関する論文を書いていた野村端峯さん等々。何か、「梁山泊」の観を呈したこの集まりが、第二の「中国語の研究会」である。

ちょうどこのころ、1946（昭21）年の10月に京都で「中国語学研究会」が発足し、その機関誌『中国語学』第1号が発行された。もちろん、わたしたちのこの集まりに参加していた者は、皆この研究会に登録、参加していたが、この京都の会の発展ぶりに触発され、東京でも、こうした運営を考えようではないか、ということになった。これは、いわば上記の第一・第二の「中国語の研究会」を延長、拡大したもので、1947（昭22）年2月末のことである。これが、第三の「中国語の研究会」で、3月から実施された。以下、参考までに、この集まりの概況を掲げておく。

〔備考〕括弧内の数字は回数を表し、各回の1行目は、期日（曜日）・会場を示し、2行目は、報告者・題名・参加者を示す。

- (1) 1947（昭22）年3月7日（金）、太田氏宅。
工藤篁、「小川環樹氏の“代名詞僭們的沿革”その他について」、太田辰夫・牛島徳次。
- (2) 同上、3月13日（木）、太田氏宅。
太田辰夫、「北京語の研究資料」、工藤・牛島・野村端峯。
- (3) 同上、3月19日（水）、茗溪会館。
牛島徳次、「旧白話小説の語法について」、太田・秦仁。
- (4) 同上、3月30日（日）、東大研究室。
「倉石先生を囲んで」、工藤・太田・牛島・伊地智善継・鐘ヶ江信光・西順蔵。
- (5) 同上、4月6日（日）、茗溪会館。
岡本隆三、「中国語のテキスト」、太田・牛島。

- (6) 同上、4月12日(土)、工藤氏宅。
工藤篁、「代名詞について」、太田・牛島・岡本・中山時子。
- (7) 同上、4月17日(木)、太田氏宅。
太田辰夫、「北京語における進行と持続」、工藤・牛島・岡本。
- (8) 同上、4月26日(土)、茗溪会館。
牛島徳次、「“没的”について」、太田・岡本・長田夏樹。
- (9) 同上、5月15日(木)、東大。
「倉石先生を囲んで」、工藤・牛島・長田・猪俣庄八・大浜皓。
- (10) 同上、5月24日(土)、東大。
工藤篁、「中国語の主格の問題」、牛島・長田。
- (11) 同上、5月28日(水)、東大。
長田夏樹、「中国語の比較言語学的研究」、工藤・牛島。
- (12) 同上、6月2日(月)、茗溪会館。
牛島徳次、「 ? 」、工藤・長田。
- (13) 同上、6月9日(月)、東大。
工藤篁、「中国語教育」、牛島・長田・大浜・今村与志雄・新開高明・秋元一郎。
- (14) 同上、6月16日(月)、東大。
工藤篁、「中国語の学習法」、牛島・長田。
- (15) 同上、6月22日(日)
「奥野信太郎氏を訪問」、太田・牛島・長田。
- (16) 同上、6月27日(金)、東大。
「倉石先生を囲んで」、太田・牛島・長田・内田道夫。
- (17) 同上、6月30日(月)、東大。
「高等学校における中国語教育」、太田・牛島・長田・内田・宇野精一。

(18) 同上、7月7日(月)、東大。

内田道夫、「描写としての言語」、太田・牛島・長田。

(19) 同上、7月14日(月)、東京文理大。

長田夏樹、「所謂『印度支那語族』について」、牛島・内田。

(20) 同上、9月14日(日)、太田氏宅。

「会の今後の在り方」、工藤・太田・牛島・岡本・長田・藤堂明保。

(21) 同上、9月28日(日)、吉昌社。

「中国語学会」発起人会、工藤・牛島・岡本・長田・内田・藤堂・
福代惟男・永島栄一郎。

上記の第21回の集まりは、この第三の「中国語の研究会」を、更に充実、
発展させるためには、どうすべきかという問題について話し合われたもの
で、その概容は次の通り。

1. まず、長田氏からこの集まりの趣旨について説明があり、ついで、工
藤氏より、これまでのこの研究会の状況が報告され、最後に、長田氏か
ら新しい会の「会則(案)」の説明がなされた。

2. 論議の結果、おおむね次のような案が決定された。

(1) 新しい会の名称は、「中国語学会」とする。

(2) 会の事務所は、吉昌社あるいは斯文会とする。

(3) 会には、次の各種委員を設け、事務の運営を計る。

イ、総務部委員 ニ、研究部 "

ロ、会計部 " ホ、教育部 "

ハ、渉外部 "

<委員会は、毎月一回開く。>

(4) 本日の出席者は、それぞれ手分けして、各分野の研究者に連絡をと
り、会への参加を呼びかける。

- (5) 新しい会の発会式を、10月26日（日）午後2時より開く。
- (6) 上記(5)のための準備会を、10月12日（日）午後2時より、吉昌社で開く。

上記(1)の、新しい会の名称と定められた「中国語学会」が、上記(6)の準備会で「中文学会」に変更され、関係各方面に郵送、配布された下記資料が、本稿題目の「中文学会」誕生の産声となったわけである。

B. 「中文学会」創立の挨拶文

1947（昭22）年10月20日付で、関係各方面に配布された挨拶文は、次の通り。（便宜上、漢字はすべて現行の通用字体に改めたが、仮名遣いは、原文のままにしておく。）

拝啓

秋冷の候愈々御清祥御喜び申し上げます。

さて今回我々中国文化研究者有志の中より中国の言語とその周辺の諸言語及び中国文化一般の真摯なる研究と併せて中国語教育の普及とその振興を図るため、ここに中文学会なる純学術研究団体が誕生致しました。

従来の中国研究諸機関はあまり孤立的或は党派のであったため却って学術諸分野の連繫進展を妨げて居りました。我々は何人といへども会員となることができ、又総会に臨み自由なる発言と、常任委員推薦の権利とを与へられます。かくて構成された常任委員会は民主的討議を行ひ、事務執行機関の活動を助け、又批判することにより健全なる発展が期待されるのであります。

思へば中国文化の研究は単に中日の地理的歴史的関係に於いて重要

牛 島 徳 次

であるのみならず、今日より明日に希望を持った日本文化形成のために、又中国文化の世界史的意義の闡明発揚のためにも、今日程強く要望されるときはありません。

されば我々は真摯純粹なる學術精神の下に、毎月の研究発表会、随時のセミナー、会報の発行等々の諸事業を行ひ、中国文化研究の飛躍的進展を念願するものであります。

各界具眼の士におかせられましては何卒この生れたばかりの研究グループのために篤き御指導と御鞭撻を賜りたく、ここに委員一同切に御願ひ申上げる次第であります。

以上簡単ではありますが、中文学会創立の御挨拶と致します。

中文学会

東京都文京区小石川町 1 - 1

中華民国学友会館内

委員 (アイウエオ順)

市川 安司 (東京高校)

猪俣 庄八 (日本大学)

牛島 徳次 (東京高師)

内田 道夫 (東京大学)

太田 辰夫 (紅陵大学)

岡本 隆三 (横浜経専)

長田 夏樹 (神奈川師範)

鐘ヶ江信光 (東京外専)

神谷 衡平 (東京文理大)

北浦 藤郎 (善隣外専)

工藤 篁 (東京商大)

倉石武四郎 (京大、東大)

「中文学会」覚え書き

河野 六郎 (一高)
小島 武男 (東京外専)
佐藤 誠 (帝国図書館)
竹田 復 (東京文理大)
田中清一郎 (東京外専)
藤堂 明保 (一高)
直江 広治 (東京文理大)
永島栄一郎 (東方文化学院)
野口 栄一 (吉昌社)
野村 正良
長谷川 寛 (東京外専)
波多野太郎 (大東文化)
福代 惟男 (東京外専)

以上

なお、このB4型わら半紙に謄写版刷りされた上記文面の左上方に、〔附記〕として、次の案内文が添えられている。

発会式、総会兼第一回研究発表会

要 項

- 1 日時 十月二十六日 (日) 午後二時
- 1 場所 斯文会講堂 (省線御茶ノ水駅下車、湯島聖堂内)
- 1 発表 石田幹之助先生

「欧米人の中国語研究史」

倉石武四郎先生

「中国言語学の建設」

II 「中文学会」の概況

A. 第1回研究発表会

中文学会の発会式、総会兼第1回研究発表会は、上記案内状の通り、1947（昭22）年10月26日（日）、湯島聖堂内の斯文会講堂で行われた。

当日の式次第、講事運営等については、資料が残っていないので不明だが、石田幹之助・倉石武二郎両先生の特別講演が行われたことは、確かである。（倉石先生の「中国言語学の建設」は、『中国語雑誌』4巻3号、1949〈昭24〉年8月、帝国書院、に掲載されている。）

この日の参会者、約120名。内訳は、一般社会人・学生、それぞれ約60名。その大部分は、当日受付で入会申込みの手続きをしている。会費は、一般社会人が年額30円、学生が10円。なお、会場費として、1人5円を徴収。

ちなみに、この日だけの会計決算は、収入合計2,215円、支出が1,020円で、残額計1,195円の黒字。もっとも、この総会開催のために、一部会員（委員その他）からあらかじめ会費を徴収したり、吉昌社社長の韓吉昌氏から通信用の封筒その他の援助を受けたりしたが、事前の累積赤字は238円で、結局、実質残金957円。これが、この総会以後の、本会運営の基金となったわけである。

B. 第2回講演会

上記第1回講演会から約1か月後、下記の要項により、第2回目が行われた。

〔講演〕

1 「東洋思想の一般性と特殊性」

東大助教授 中村 元先生

1 「中国における民謡研究」

文理大講師 直江広治先生

1 日時 11月30日（日） 午後1時

1 場所 斯文会講堂（湯島聖堂内）

この日の参会者は、約100名。特に目立ったのは、会員以外の参加者がかなり多く、その数、約30名。講師と演題が異色のものであったためであろうか。前回の講演会以後、この日までに、ぼつぼつと入会申込みが続いていたが、この日会場受付で入会手続きをした人が、17名（一般5名、学生12名）。ちなみに、この日だけの会計決算は、収入合計675円、支出が280円で、残額計395円の黒字。結局この日直前の残額186円と合わせて、計581円が実質残金となった。

以上、特に会計にこだわったのは、一つには、わたしが当時会計部委員を担当していたので、多少の資料が手もとに残っていたためであり、もう一つには、今日と当時とでは、いかに物価、貨幣価値が違うかという驚きを、今更のように禁じ得なかったからにほかならない。もっとも、これは、もう一方で、当時のインフレのものすごさ、恐ろしさが、いまだに脳裡から離れないためでもあろう。たとえば、ごく身近かな月刊『中国語雑誌』も、1946（昭21）年10月発行のものは、定価3円で、約2年後の1948年9月発行のものは、定価30円となっているし、『桃源』（吉昌社）も、1947（昭22）年4月発行のものは、定価15円。それが9か月後には、20円になっている。

C 第3回講演会

第3回講演会は、第2回から約2か月後の、1948年1月25日（日）に行われたが、残念ながら、当日の会場、講演者および講演題目など、わたし

の手もとには何の資料も残っていない。残っているのは、会計決算書のみで、これによって推測すると、当日の参会者は、約70名。ちなみに、この日一日の決算は、収入合計265円、支出が1,110円で差引き845円の赤字になっている。ただし、前回の講演会のあと、会費値上げが決められていたらしく、当日参加した会員40名から、追加会費として1人20円ずつ、計800円が納入されたので、実質残金は、マイナス45円。これを当日前日までの残金52円90銭で清算すると、会計部に残ったのは、7円90銭だけだった。まさに、破産寸前の状態である。

ただし、その後、2月中に追加会費その他で、計約880円入金。これでやっと一息ついたが、会計出納簿の最後には、

5月23日、『中文月報』第1号、200部。用紙・印刷代、郵送料、計804円支出。残高54円90銭。

と締められ、それ以下は空白になっている。これまた残念、というより遺憾ながら、この『中文月報』第1号も手もとに見つからず、残金の処理も、皆目わからない。

結局、「中文学会」は、このころ（1948〈昭23〉年5月末から6月初めごろまで）流れ解散、自然消滅した、と考えざるを得ない。

そして、京都の「中国語学研究会」は、倉石先生が東大専任となって東京に移ってこられたため、関西支部・関東支部という構成になり、その関東支部の第1回の月例会が開かれたのは、1949（昭24）年4月24日で、会場は、東大文学部中国文学研究室であった。

〈むすび〉

1. 以上のように、「終戦」後まもなく生まれた「中文学会」は、ごく少数の有志によって形成された、ささやかな「中国語の研究会」を母胎とす

るものだった。そして、この学会は一時成功したかに見えたが、わずか半年あまりで、あえなく散った。そのため、この学会の存在は、これまでほとんど世の人の口のはにのぼることがなかったが、その設立の趣旨は、その後生まれた「日本中国学会」に、りっぱに活かされたと思われるし、さらに、予想外に多くの人たち、特に若い学生諸君の共感・参加を得たことは、わが国における中国文化研究史上、かなり重要な意義を持つといえるのではないだろうか。

2. では、この「中文学会」が、どうして半年あまりという短命に終わってしまったのだろうか。当時はもちろん、今でもわたしには、よくわからない。この問題については、人によりいろいろな見かたがあるかも知れないが、何といても、四十数年前のことであるから、幽霊の足を探すようなものかも知れない。

中国の古典『孟子』に、「天時不如地利、地利不如人和。」という一段がある。「天候・時期にいかにも恵まれていても、有利な地勢にはかなわないし、いかに有利な地勢でも、一心同体になった人たちの力にはかなわない。」という意味であろうか。「中文学会」の興亡は、まさにこの道理に、ぴったり合うように思われる。

「終戦」直後の、「天命維れ新たなり」という千載一遇の好機、大都会であり首都である東京、それに、向学心に燃えた同好同志の人たちの協力。どれ一つ取ってみても、「間然とするところなし」だった。しかし、明るい表の裏には影がある。たとえば、当時のインフレ、1949（昭24）年4月に始まる学制改革への対処、これらは「天の時」の影といえよう。首都は首都だが、一面焼野原の東京、衣食住に追われる大都會の生活、これは「地の利」の影であろう。せめて「人の和」でもあれば……と思うが、目ざすところは一つであっても、会員特に年輩者のひとりひとりが、あの十数年にわたる戦争の影を引きずっていた。この影の濃淡の差

が、言動に微妙に反映する。

影を消す唯一、自然の方法は、明かりを避けることである。「中文学会」の、光り輝いたともしびも、いつしか消えざるを得なかった。

3. 本稿は、その標題の示す通り、あくまでも「覚え書き」であって、いわゆる学術論文でもなければ、研究報告でもない。これは、中国文化、特にその言語を多年学習、研究してきた、また、これからもし続けようとしている日本人のひとりとして、直接しかも深くかかわった「中文学会」を素材とし、過去を反省し、現在・将来に、できるだけ過ちを少なくしたいと願うための「覚え書き」に過ぎない。読者諸賢のご諒恕を請う次第である。 (1989.8.25)

〔備考〕 ご参考までに、1948（昭23）年1月12日現在の「中文学会 会員名簿」を付記しておく。（記号中、○は常任委員、〔 〕は執行委員を示す。）

なお、本稿の「中文学会」は、1949（昭24）年ごろ結成された、当時の東大中文研究室の「中文学会」とは、全く別のものである。

A（一般会員）

有馬健之助	〔会計〕牛島 徳次（東京高師）
飯田 利行（駒沢大学）	○内田 道夫（東京大学）
池上 貞一（愛知大学）	〔総務〕宇野 精一（東京高師）
池上 二良（東大大学院）	宇野 義方（東大大学院）
○市川 安司（東京高校）	遠藤 栄一（東洋タイル）
稲葉 士良（東京サイクル）	大木 一郎（中華日報）
猪熊 文炳（善隣外専）	○太田 辰夫（紅陵大学）
〔教育〕猪俣 庄八（日本大学）	大村 興道（東京第二師）

- | | |
|--------------------|------------------|
| 大森 悟 (日本大学) | 菅谷 正二 (順和興産) |
| 大山 正春 (明治学院) | 鈴木 択郎 (愛知大学) |
| 岡崎 修 (外務省) | 竹内 安徳 (第二復員局) |
| 岡本吉之助 (善隣外専) | ⊗竹田 復 (東文理大) |
| 岡本 隆三 (横浜高商) | ○田中清一郎 (東京外専) |
| 長田 夏樹 (神奈川師) | 谷本 勝代 (官吏) |
| 〔長〕加藤 常賢 (東京大学) | 田森 襄 (日大予科) |
| 〔総務〕鐘ヶ江信光 (東京外専) | 月洞 讓 (日大二中) |
| 鎌田 義勝 (大森中学) | ○藤堂 明保 (一高) |
| 〔総会長〕神谷 衡平 (東京文理大) | 戸田 勝子 (東洋文化) |
| 川井 正明 (第二復員局) | ○直江 広治 (東文理大) |
| 韓 吉昌 (吉昌社) | 〔書記〕永島栄一郎 (東方文化) |
| 北浦 藤郎 (善隣外専) | ○中村 元 (東大) |
| ○工藤 篁 (東商大予) | 〔研究〕西 順蔵 (東商大予) |
| ○倉石武四郎 (京大、東大) | 沼尻 正隆 (日大予科) |
| 桑島 信一 (愛知大学) | ○野口 英一 (吉昌社) |
| 幸田 克己 | 野村 瑞峯 (紅陵大学) |
| 幸田 耕造 | 〔総務〕野村 正良 (跡見高女) |
| 〔研究〕河野 六郎 (一高) | ○長谷川 寛 (東京外専) |
| ○小島 武男 (東京外専) | 〔渉外〕波多野太郎 (大東文化) |
| ○後藤 基己 (東方文化) | ○花村 芳樹 (東洋文化) |
| 小西 甚一 (東文理大) | 広瀬 正義 (善隣外専) |
| 〔会計〕佐藤 一郎 (東大大学院) | 〔教育〕福代 惟男 (東京外専) |
| ○佐藤 誠 (帝国図書館) | ○増淵 竜夫 (東京商大) |
| 沢口 剛雄 (学習院) | ○松井 武男 (成溪高校) |
| 久葉 盛吾 (アテネフランセ) | 馬淵 和夫 (東文理大研) |

- 水沢 利忠 (東文理大研)
三根谷 徹
宮川 啓三
○宮田豊太郎 (都立六中)
守屋美都雄 (東洋大学)
安居 香山 (東文理大)
安富 隼平
○山口 修 (東洋文化)
山下 竜二 (東大大学院)
山本 謙吾
(計78名)
- B (学生会員)
- 秋元 一郎 (東京大学)
伊藤久美子 (東洋大学)
伊藤 敬一 (東京大学)
飯田 吉郎 (東文理大)
池沢 正夫 (東文理大)
池谷 文夫 (東京大学)
石井 宏 (東商大予)
泉 隆貳 (東文理大)
磯田 基義 (東京高師)
磯部 健 (東商大予)
今村与志雄 (東京大学)
岩井 毅 (東京大学)
上田金次郎 (東京外専)
- 上田 慶一 (東京大学)
牛山 正雄 (東文理大)
内山 知也 (東文理大)
遠藤 一郎 (東文理大)
緒形 暢夫 (東文理大)
大石 豊 (東文理大)
大垣 方孝 (東京大学)
大島 隆 (東京大学)
大村 梅雄 (東京大学)
沖野 亦男 (東京大学)
加藤 道理 (東京大学)
寛 一生城 (東京大学)
柏瀬 一郎 (東商大予)
金子 泰三 (東京高師)
金田 元彦 (国学院大)
河上 典 (善隣外専)
木村郁二郎 (東文理大)
日下 武二 (東商大予)
久保 富久 (明治学院)
黒川 恒男 (明治学院)
黒沼 正昭 (横浜高商)
桑山 竜平 (東京大学)
古賀 周作 (東文理大)
児玉 修 (紅陵大学)
小林 玄 (紅陵大学)
近藤 直也 (紅陵大専)

- | | |
|--------------|---------------|
| 佐藤 信久 (東文理大) | 長谷川木菟哉 (東文理大) |
| 坂井 健一 (東文理大) | 原田 和一 (東京外専) |
| 真田 光雄 (東京高師) | 半田 佳夫 (東京大学) |
| 志村 和久 (東文理大) | 深山 厚吉 (東文理大) |
| 新開 高明 (東京大学) | 福田 稔 (東京大学) |
| 進藤 善之 (東文理大) | 細見 宏 (東文理大) |
| 須田健一郎 (東商大予) | 堀越 正春 (浦高) |
| 須永 和親 (東文理大) | 朴 慶植 (東洋大学) |
| 菅沼 篤 (東商大予) | 前島 幸男 (東京商大) |
| 田中 良生 (東京大学) | 増田 栄次 (東京高師) |
| 高田 淳 (一高) | 松本 昭 (一高) |
| 高原 兼敏 (東商大予) | 水沢 竜夫 (東文理大) |
| 武田 利明 (国際外語) | 観山 文雄 (東京大学) |
| 立間喜太郎 (善隣外専) | 八木 治郎 (東京大学) |
| 谷川 英則 (東文理大) | 柳 俊一 (東文理大) |
| 都竹通年雄 (慶応語研) | 山口 敏明 (東商大予) |
| 塚田 清策 (東文理大) | 山本 哲夫 (東文理大) |
| 鶴巢 劭 (一高) | 吉森 良宏 (駒沢大学) |
| 中谷久次郎 (東京大学) | 和田宇兵衛 (東商大予) |
| 中根 千枝 (東京大学) | 渡辺 昌 (東文理大) |
| 中村 璋八 (駒沢大学) | 渡辺 昇 (紅陵大学) |
| 中山 時子 (東京大学) | (計86名) |
| 永井徳次郎 (日大高師) | |
| 西巻 昭 (横浜高商) | |
| 野沢 弘 (横浜高商) | |
| 長谷川節三 (東文理大) | |